

論文内容の要旨及びその審査結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 日本語学・日本語教育学分野	氏 名	Ni Wayan Prilyasinta
学位審査委員	主査 教授 坂本 正 副査 教授 宇治谷 映子 副査 教授 大岩 昌子 副査 甲南大学（外部審査委員） 教授 藤原 三枝子		

1. 論文の目的と意義

インドネシアは、日本語学習者数が多いにも拘らず、日本人教師の少なさやインドネシア人日本語教師の日本語能力の低さなどインドネシアの日本語教育には様々な問題がある。執筆者のインドネシアでの教育経験からインドネシア人日本語学習者は最初は高い動機づけで日本語の学習を開始するが、徐々に時間が経過するに従い、動機づけが低下していく。このような状況からインドネシア人日本語学習者の学習動機づけ、特に動機づけの変化とその要因について明らかにすることは、インドネシアの日本語教育に大きく貢献し、社会的な意義も大きい。

2. 論文の構成と内容

本論文は、全5章で、本文、参考文献、資料と続き、総頁数298頁の論文となっている。以下、概要を述べる。

第1章「はじめに」では、インドネシアの日本語教育の現状を国際交流基金の統計資料に基づき、詳細に報告している。その中で、インドネシア人日本語学習者の学習動機の低下に問題があることを指摘し、動機づけの研究に至ったことを述べている。

第2章「先行研究」では、これまでの外国語学習における動機づけ研究の歴史を整理し、簡潔にまとめている。先行研究では、学習環境、調査の対象者などが異なり、一致した見解は得られていない。一回のアンケートやインタビュー調査だけで議論している研究も多く、動機づけの変化を明らかにしている研究は少ない。

本研究では、以下の3つの研究課題を明らかにする。（1）インドネシアの大学で日本語を専攻しているインドネシア人日本語学習者の1学期間での動機づけの変化。（2）動機づけの変化をもたらした要因。（3）動機づけの変化の要因の報告を受けた日本語

論文内容の要旨及びその審査結果

教師が教えたクラスの学習者の動機づけの変化、である。

第3章「調査」では、まず4つの動機づけ、「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」「理想の自己を目指す動機づけ」「義務の自己による動機づけ」)について操作的定義を行い、これらに関して33の調査項目を設け、学習者の母語であるインドネシア語でアンケート調査を学期始めと学期終わりに2回行なっている。アンケートは、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの6件法で、調査時間は10分から15分程度である。さらに学習者が日々の日本語学習において、動機づけがなぜ上昇したのか、なぜ低下したのかを1学期間インドネシア語で記述してもらう学習日記調査も実施している。記述データのコーディングには、論文申請者以外にインドネシア人大学院生一人にもコーディングを依頼し、判定に迷った場合は大学院の授業で相談し、最終的な判定を下している。アンケート調査は2回行われたが、1回目は、インドネシアのバリにある国立大学のA大学と私立大学のB大学で日本語を専攻している学生に対して行われ、2回目の調査は、A大学の学生に対して行われた。学習日記調査に関しては、A大学の学生、計30名に協力してもらっている。

第4章「結果と考察」では、まず、研究課題(1)に関しては、A大学もB大学もどちらも学習者の動機づけが1学期間の日本語学習において全体として低下していた。しかし、学年ごとに見ると、A大学では、1年生は動機づけが低下せず、維持できているが、2年生と4年生に統計的に有意な低下が、また、3年生には低下の有意傾向があった。一方、B大学では、1年生の動機づけが統計的に有意な低下が、2年生には低下の有意傾向が見られたが、3年生と4年生では動機づけが低下せず、維持できていた。さらに、動機づけの種類の変化を見ると、A大学もB大学も共通して、「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」に変化が見られ、低下していたが、「理想の自己を目指す動機づけ」に関しては、A大学の学習者は低下したが、B大学の学習者は低下しておらず維持できおり、「義務の自己による動機づけ」に関しては、A大学の場合低下の有意傾向があったが、B大学の場合は動機づけが維持できていた。次に、研究課題(2)に関しては、学習者の動機づけが様々な要因によって影響されていたことが分かったが、その中でも6つ要因が共通してあることが明らかになった。それらは「教師の教え方」、「成功に関する自己定義・判断」、「失敗に関する自己定義・判断」、「宿題」、「自律学習」、「課外活動」であった。最後に、研究課題(3)に関しては、4学年全体としては、学習者の動機づけが統計的に有意に低下していた。しかし、詳しく見ると、1年生と4年生に関しては有意に低下していたが、2年生と3年生の動機づけの変化には統計的な有意差がなく、1学期間動機づけが維持できていた。

論文内容の要旨及びその審査結果

第5章「結語」では、調査結果をまとめ、インドネシアの日本語教育への示唆について述べ、最後に、本研究の今後の課題について述べている。

3. 論文審査の結果

本研究は1学期間学習者の動機づけの変化を量的分析により、また、動機づけの変化の要因を質的分析により詳細に調べたものである。これまでの研究では見られない新しい知見も数多くあり、動機づけ研究を更に一步進めた論考である。評価できる点を挙げると、1) 定量的、かつ、定性的分析を用いた混合研究法の使用、2) 学習の動機づけに影響する要因の抽出、3) 学習の動機づけに影響する要因の両面性の発見、4) 研究と教育のインターフェイスの試み、5) 被験者の母語の積極的な活用などがある。

今後の将来的な研究の課題としては、1) 一人の学習者を入門レベルから上級レベルに至るまでの動機づけの変化を見るケーススタディー、2) 動機づけの普遍性と個別性の研究、3) 動機づけと日本語能力の関係、4) 動機づけと効果的な指導法など今後の研究を期待したい。

本学位審査委員会は、論文申請者が参加した学習者から調査協力の同意書を取っており、学習者が書いた学習日記も研究終了後に全て廃棄する予定であり、研究倫理上の問題がないこと、また、「名古屋外国語大学大学院 学位論文審査基準」に掲げる各項目「1. 当該分野における学術的な特色と独創性、2. 学界に対する学術上の寄与または社会的意義、3. 資料の取扱いの適切さ、4. 先行研究の取扱いの適切さ、5. 研究方法の選択・実行の適切さ、6. 構成の体系性、7. 論旨の明快性・一貫性」を満たしていると判断した

以上を総合的に判断し、論文の内容及びこれに関連する科目の学識並びに研究者として、自立して研究活動を行うに必要な能力を有しているとの評価で学位審査委員全員が一致し、本申請論文が博士学位論文としての水準に達していると認め、「合格」と判定した。

(以上)